

空道無門

KUDOMUMON VOL.7

かつて、大道塾専門誌として発行されていた立派な雑誌「大道無門」。情報の発信がウェブ中心に行われる時代となったことで、数年前にその役割を終えましたが…。「やっぱり紙で、大道塾や空道の企画記事を残して欲しい」というリクエストが多く寄せられたことで、こじんまり復刊！年2回、春・秋に発行される全日本大会パンフレット内にて、掲載いたします。

2016 無差別全日本大会 展望

ペナントリボンに名を刻む四天王。そしてスーパールーキー。かつてない熾烈な闘いがはじまる。

【総論】

無差別全日本優勝者、階級別全日本最優秀勝利者だけが手にすることのできる真紅の旗、北斗旗。ペナントリボンに刻まれる文字は、岩崎弥太郎、長田賢一、加藤清尚、山田利一郎、酒井修、稲垣拓一、飯村健一、小川英樹、森直樹、アレクセイ・コノネンコ、山崎進、セーム・シュルト…。そこに名があることは、真の空道王者たる証といえよう。今大会では、その北斗旗に名を残す加藤久輝、野村幸汰、清水亮汰、目黒雄太(上写真左から)が出揃う。現在の空道四天王が顔を揃えるうえに、高校3年で階級別全日本(260+クラス)準優勝を果たし、高校卒業と同時に総本部寮生となった100kg超のスーパールーキー岩崎大河が無差別デビューを果たす。果たして、岩崎が大物食いをみせるのか？ 無着衣MMAの世界から凱旋する加藤が世界を驚かせたスーパーマンパンチを決めるのか？ いやいよ打撃が研ぎ澄まされてきた野村の無差別初戴冠は成るのか？ それとも、軽量の清水・目黒が牛若丸のごとき身のこなしで、再び超重量級勢を封じ込めるのか？ かつてない熾烈な闘いがはじまる。



軽量ブロック.....

2015、2016年と全日本-230クラス連覇、2015年無差別準優勝の目黒雄太と昨年の全日本-240クラス優勝者川下義人がこのブロックを駆け上がる確率は高いが、2014世界選手権以来の大会復帰となる谷井翔太がどこまで食い下がるか？ 世界選手権で前回優勝者コリャン・エドガーと互角の闘いを演じ、エドガーを決勝棄権に追い込んだ谷井は、日本の世界王座奪還の立役者ともいえる存在。その後、消防官となったため、その訓練を通じてむしろ当時より体力は増している感もある。昨年無差別全日本ベスト8の小芝裕也が両者を追う。また、体力指数230未満ながら関西地区予選で準優勝した高垣友輝の気持ちの強い闘いぶりも可能性を秘めている。

2014世界選手権、3連覇を懸けていたエドガーと旗の割れる接戦を演じた谷井(左)▶



中量ブロック

今年の全日本-240クラス優勝者、昨年全日本無差別ベスト4の**田中洋輔**は現在の空道界には珍しく、遠い間合いから打撃を当てて組みつきや胸と胸を合わせた差し合いに持ち込み、万力の如く相手を捻り倒し関節技を極める。予定調和的なキレイな攻防を望むタイプが大好物だ。関東地区予選で本戦3-3、延長4-1と旗の割れる接戦を演じた**神代雄太・服部晶洸**は、いずれも中間距離での技の比べ合いにおいては高いパフォーマンスをみせるが、この田中を攻略できないようなら、世界選手権においてロシア勢の圧力を食い止められるはずもない。世界選手権代表、2012年全日本同階級優勝者・**内田淳一**のカムバックにも注目したい。**山崎順也**は清水亮汰より1歳下、岩崎大河より1歳上の20歳で、二人とともに総本部で寮生活を送るが、清水・岩崎が全日本優勝・準優勝の実績を収めているのに対し、いまだタイトル獲得の経験がない。ジュニア時代には、清水からも岩崎からも勝利を収めたことがあるだけに、忸怩たる思いだろう。二人に追いつき、追い越すことはできるか? 関東地区予選準々決勝、神代(左)vs服部。接戦を神代が制した。▶



軽重量ブロック

昨年「打撃で組み技を制する」「小よく大を制する」「空道以外に格闘技歴のない者が他競技からの転向者を制する」という3つの空道の理想を、全日本無差別史上最年少優勝のかたちで体現した**清水亮汰**が頭一つ抜きん出ている感はある。追走するのは、昨年、セーム・シュルト以来18年振りの大道塾外団体所属の全日本王者(-250クラス)となった**加藤智亮**、今春の全日本-250クラス準決勝でその加藤と接戦を演じた**野田洋正**、昨年全日本無差別4位の**押木英慶**か。この他、東北地区予選でベテラン勢を制した**伊東駿**にも期待したい。



関東地区予選。準決勝、山崎はキムヒギユを右ミドルで下した。▶

重量ブロック

無着衣総合格闘技への取り組みから**加藤久輝**が2年振りに空道に復帰する。一方、**野村幸汰**は、2014年全日本260+決勝ではその加藤のアウトボクシングに敗れてはいるものの、その後、タイ人コーチのもとで打撃をブラジリアン柔術家のもとで寝技を磨いている。加藤との再戦を迎えれば、188cm、112kgのフィジカル、柔道全日本選手権ベスト16の投げ技と相まって、2年半前とはまったく次元の異なる闘いを展開するであろう。また、その野村に今春の全日本260+決勝で食い下がった**岩崎大河**も、総本部寮生になって以来の半年で、急速に力を伸ばした様子。無差別、体力別合わせて全日本優勝8回の加藤が優勝候補筆頭であることに変わりはないだろうが、この二人の猛追は波乱を呼びかねない。また、**加藤和徳**は、2014年と今年、全日本-260クラスを制しており、実績でいえば四天王に次いで無差別制覇に近いポジションにいる。その加藤からタップを奪ったこともある変則絞め技師・**渡部秀一**、昨年、決勝で加藤を破って全日本-260クラス王者となった**山田壮**、右ストレートの切れる**辻野浩平**、韓国人らしいパワフルな戦いをみせる**キムヒギユ**も、虎視眈々と北斗旗を狙っている。ダークホースとしては、**五十嵐健史**を挙げておこう。まるで未開の山奥から出てきたかのような風貌、闘いぶりで、関東予選ではテクニシャンを飲みこんできた「野人」。番狂わせを起こすか?



▲今春の全日本260+クラス決勝、野村(左)に中段回し蹴りをヒットさせる岩崎。

女子クラス

大谷美結は、このままのペースで2年間成長すれば、世界選手権でロシア・東欧勢を制し、女子空道初の日本人世界王者になれるのではないかと、そう思わせるだけのポテンシャル、意志をもつ。その大谷と3度対戦し、2015年春の初回対戦では勝利し全日本王者となったものの、2015年秋、2016年春と、全日本決勝で連敗している**今野杏夏**。4度目の対戦で、星をイブーンに戻すことができるか? 一方、**大倉萌**は19歳にして空道歴10年、女子のなかでは随一とも思われるバランスの取れた技術をみせるが、今春の全日本は負傷欠場していた。今野、大谷を連破すれば、女子でも小よく大を制すドラマの実現となる。



関東地区予選決勝。大倉(左)は、2012全日本王者の▶吉倉千秋のパンチ連打を被弾することなく完勝した。

パンフレット表紙とともに振り返る

北斗旗35年外伝

北斗旗空手道選手権～北斗旗空道全日本選手権35年の歴史を振り返る企画。優勝者や入賞者にかんしては記録が残され、その決勝・準決勝に関しては振り返られることも多いので、ここではあえて、それらの偉大な選手には触れず、大道塾外の選手で印象深かった選手、大会会場で起きた事件、などを中心に、大会パンフレットのトーナメント表をみて振り返ってみたいと思います。題して「北斗旗35年外伝」パンフレット表紙とともに、懐かしんでください。



- 注1:世界選手権に関しては、選抜された選手しか出場しておらず、外伝。になり得ないゆえ、触れていません。
- 注2:パンフレットの表紙画像、収集してきました都合上、表紙にマジック等で書き込みがしてあるものもございます。ご了承ください。
- 注3:名前の後のカッコ内の数字は出場時の年齢です。またカッコ内の所属名は基本的に出場時の所属です。出場時でなく、その後の所属に関して言及する場合は、その後、現在の、などと付記しています。スペースの都合上、敬称は略しています。

1981 - 2016

1981年 無差別
パンフのイラスト、拳サボをはめておらず、素手。そしてなにより大会名が「全東北空手道選手権」、のちに、第1回の「北斗旗空手道選手権」として、現在では第1回の「空道全日本選手権」としてカウントされるようになりましたが、当時はそういう認識だったのか…。この年から、後に黒道着のコンヤク殺法で話題を呼ぶ鍋島次雄(体術・23)のほか、三浦悦夫(現大道塾石巻支部支部長・17)、狐崎一彦(現大道塾盛岡支部支部長・20)、村上智章(現大道塾中四国本部本部長・17)といった現在の大道塾支部長たちが出場している。

1982年 無差別
村山雅博(毘沙門天道場・19)はこの年より出場、92年まで11年に渡り出場し、85年大道塾外の選手として初の北斗旗王者(-230)となり、さらに86年、連覇を達成。大道塾外の選手で全日本連覇を達成した選手は、この村山とセーム・シムルしかいない。宇賀持一美は勝美道場の所属で33歳で出場、この後、大道塾に入門し、日立支部を開設する。伝統空手のスタイルながら強打者だった中畑要(のちに闘心流・20)、松本英樹(原声会館・24)の名も。

1983年 無差別
長田賢一(現大道塾仙台西支部支部長・19)、加藤清尚(現大道塾行徳中野支部支部長・17)がこの年より出場。後にキックボクサー→数々の名勝負を裁くレフェリーとなる高木修二(毘沙門天道場・18)の名も。

1984年 無差別
88年、95年に掌底フックで-240王者となる平岡義雄(初出場時所属非公認、のちに日神会・26)がこの年より出場。平岡は2005年にも47歳にして-240クラスで全日本出場を果たしている(その際の所属は掌道会)。

1985年 体力別
この年より、春は体力別全日本、秋は無差別全日本が開催されることとなる。ハードパンチャーで名を馳せた有倉勉(隈本塾、のちに日神会・24、弟の純も北斗旗で活躍)、松下善裕(我流、22)が初出場。パンフ表紙のイラストが拳サボつきになったのもこの年から。

1985年 無差別
山田利一郎(現大道塾新潟支部支部長・24)初出場。この頃の情景として、印象に残っている色彩は、審判の服装がスカイブルーのジャケットに、真っ白なスラックスだったこと。その服装のまま、原宿駅から電車で乗って行くのが大道塾古参の支部長たちのスピリットであった。

1981 無差別	1982 無差別	1983 無差別	1984 無差別
1985 体力別	1985 無差別	1986 体力別	1986 無差別

1986年 体力別
佐藤塾空手、柔気拳法などを学んだ横木研輔(所属非公認・26)が初出場で-230準優勝。後に北斗旗をはじめ各種大会、キックボクシング界で倒し倒されの熱い闘いをみせる染谷浩明(所属年齢非公認)、テコンドーや硬式空手の全日本王者で翌年にはシュートボクシングのリングでシーザー武志と闘う菊地信弘(日本空手道竹生会、27)の名も。

1986年 無差別
長身、イケメンで技のキれる京崎武(誠空会・20)の他、大道塾のトップ選手をKOした坂本武司(日本拳法・22)、フルコンタクト空手界で活躍した深田英樹(寛水流、のちに時代塾・24)らが初出場。記憶が正しければ、会場だった代々木第二体育館の照明のライトが割れていて、試合中にガラスがバラバラと落ちてきて、大会アナウンサーが「危ない!!!」と叫んだ。今だったら大問題だが、当時は何事もなかったかのように大会は進んだ。

村上 智章 18才
161+62 (223) 四級 3年 宮城
大道塾

▲左ハイの切れるテクニシャンだった村上支部長、若い!(1982年無差別より)

加藤 清尚 17才
161+55 (216) 五級 1.5年 宮城
大道塾

▲17歳、55キロで初出場を果たした加藤支部長(1983年無差別より)

1987年 体力別

渡辺慎二(現大道塾浦和支部支部長・26)、雑誌格闘技通信の企画で「イカンガ軍団」の一員として活躍する八木橋敏文(尚武館・24)、硬式空手の全日本王者だった打田直寛(拳誓会・23)が初出場。

1987年 無差別

道着を着用せず、ムエタイパンツのみでの出場を許可されたバーヤップ・プレムチャイ(元ムエタイラジャダムナスタジアム・ウェルター級王者、当時2位)が衝撃的だった。この年から、グローブ系競技とのかかわりが深くなる。一方で、のちにUFCに初めて出場した日本人となる市原海樹が、大道塾総本部入門半年にして出場。高校時代にフルコンタクト空手と、ボクシングインターハイ出場の経歴を持つ19歳、体重はまだ66キロで、アウトボクシングのスタイルだった。190センチの長身を活かしたフルコンタクト空手界で活躍した上野正一(徹武館・22)、キックボクシング、ボクシングでプロとして活躍し、現在はK-1等のメインフェリーを務める大成敦(のちに大成塾・19)、中国武術のような不思議なスタイルで注目を集めた山下明人(のちにSSC WILD BOY・21)らが初出場。

1988年 体力別

この年の一240決勝、平岡義雄vs山下一盛(26)は、ともに日神会所属。大道塾以外の団体の所属選手同士が北斗旗決勝を争ったことは86年一230の村山vs横木もあるが、同一団体の選手の対戦となると、歴史上この平岡vs山下のみ。八木橋敏文と双子の八木橋孝(尚武館・25)、フルコンタクト空手で実績を残していた吉井義勝(所属非公認・25)が初出場。後にキックボクシングの日本王者となる細川英男(所属非公認・20)は、市原海樹から勝利を挙げている。飯村健一(現大道塾吉祥寺支部支部長・19)も初出場。

1988年 無差別

寺の住職であり、のちに少女ダンサーとして有名となった娘とともにテレビ出演を重ねることになる村上聖一(沖縄松林流興道館・27)、稲垣拓一(現大道塾総本部師範・20)がデビュー。

1989年 体力別

この大会で、長谷川朋彦(所属非公認・19)はシュートボクシングの選手として名を馳せた阿部健一(健闘塾・20)に一本負けを喫し、その後、大道塾総本部に入門、2000年には一240優勝を果たした。94年に新空手全日本王者となる岩本(清水)裕治(所属非公認・24)が初参戦。

1990年 体力別

この大会で、小川英樹(少林流空手道錬心館・19)が初出場、優勝した飛永耕治に敗れ、その後、大道塾東北本部に入門、3年後の93年に一230優勝を果たした。日本拳法の強豪、三野宮信弘(拳剛塾・29)が参戦。

1991年 体力別

前年センセーショナルなデビューを果たしたピロコフが母国からさらなる強豪を連れて来るとのことで「ソ連」枠が用意された。この年以降、毎大会、数人のソ連(ロシア)人選手が参加するようになり、それが、空道世界普及の礎に、後にグローブ空手やアマ修斗で全日本優勝→準優勝を果たす岡崎正典(倉塾・20)も参戦。

1991年 無差別

決勝、加藤清尚vs沖見正義(大道塾千葉支部・30)は、観戦に訪れていたフリーアナウンサー・生島ヒロシがスピーカーを通じ、場内に実況すること、体格で大きく劣る加藤の健闘を讃える面が強調され、沖見には少し気の毒な気がした。ちなみに、91年の無差別、翌92年の体力別までは、トーナメント表に「飛び入り」の枠があり、当日の朝、開場後「出場されたい方がいらっしゃいましたら本部席までエントリーを」というアナウンスが観客席に響いた。まるで村瀬の相撲大会のような長閑さを感じさせるが、これは「素性の分からない者がいきなり挑戦してこようと迎え入れる」という北斗旗のスタンスを示すものであった。実際、この飛び入り枠を使ってかなりの手練れが出場することもあり、当日までどんな強豪が挑んでくるか分からないことが、出場選手に緊張を、観客に楽しみを与えていた。

1992年 体力別

武山卓己(現大道塾仙台東支部支部長)が18歳、初出場で一250優勝。2015年に川下義人(大道塾日進支部)が同じく18歳初出場で一240を制するまで、この記録に並び者は現れなかった。林忠臣(29)はこの大会、東真会所属で初出場、後に大道塾に入門し、佐久道場責任者となる。後に素手素面でも顔面を殴り合う競技ルールの空手やマンマラーウェイで活躍する長谷和徳(闘道会・23)も初出場。なお、前年、66.5キロの体重で一230クラスに出場していた高松猛(現大道塾練馬支部支部長・24)は、1年後のこの大会では86キロに増量、2階級上の一250クラスに出場していた。

1992年 無差別

アレクセイ・コノネコ(現大道塾東北本部師範)が18歳で初出場。当時はサンボの経験や武器に、タックルなど組み技を駆使していた。後に、新空手全日本王者となりキックボクシング界でも活躍する阿部修治(所属非公認・20)が初出場。

1993年 体力別

現国会議員の松波健太(大道塾早大準支部・21)、後にシュートボクシング王者となる服部高明(風吹ジム・22)、キックボクシング日本王者となる鈴木宏(所属非公認・22)らが初出場。

1993年 無差別

フルコンタクト空手で実績のあった村山龍(空研塾・24)、日本拳法の猛者であった辻井恭(拳友会・27)が初出場。辻井はこの年3位、97年に6位入賞。



1987 体力別



1987 無差別



1988 体力別



1988 無差別



1989 体力別



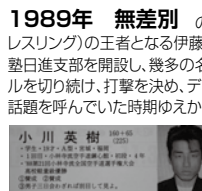
1989 無差別



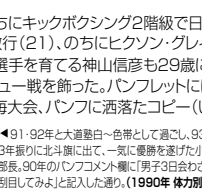
1990 体力別



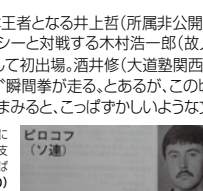
1990 無差別



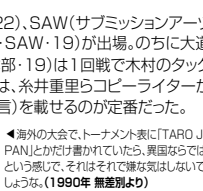
小川英樹 (1990年 体力別)



飛永耕治 (1990年 体力別)



ピロコフ (ソ連) (1990年 体力別)



海外の大会で、トーナメント表に「TARO JAPAN」とだけ書かれていたら、異国ならではの感で、それはそれで嫌な気はしない(1990年 無差別より)

1990年 無差別

誠空会主催大会のチャンピオン、住本和隆(格闘塾・27)が初出場。ピロコフが、ロシア人として初めて北斗旗に出場。初戦、豪快なフックで失神KOを奪う。これが後のロシア人の空道の発展の始まりである。ちなみにトーナメント表にはピロコフ(ソ連)とのみあり、年齢もファミリーネームも身長体重も記載なし。これはバレストロイカ完了前の情報のなさゆえ……ということにしておこう。



1991 体力別



1991 無差別



1992 体力別



1992 無差別



1993 体力別



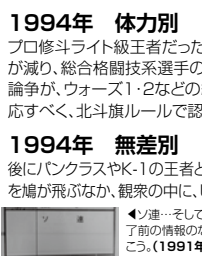
1993 無差別



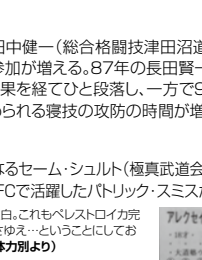
1994 体力別



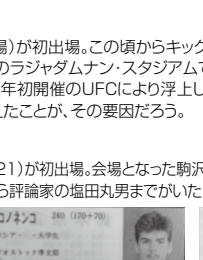
1994 無差別



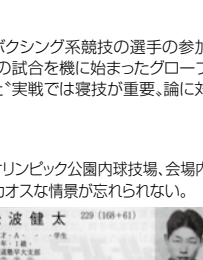
ソ連……そして空白。これもバレストロイカ完了前の情報のなさゆえ……ということにしておこう。(1991年 体力別より)



「飛び入り」枠……これも吉きき時代! (1991年 無差別より)



▲18歳にして立派な髭を蓄えていたコノネコ (1992年 無差別より)



▲まさか国政を担う「先生」になるとは…… (1993年 体力別より)

1995年 体力別

極真空手を学びつつサンボ全日本王者になった藤井一郎(スポーツ会館・20)が出場。

1995年 無差別

WUKO(現在のWKF)スタイル空手の世界選手権で優勝経験を持ち、バンクラスに参戦していたトーン・ステリング(極真武道会・31)、99年、03年に無差別8位に入賞する日本拳法の岡崎克史(所属非公明、のちに青葉拳友会と公表・24)、総合格闘技やサンボで活躍し現在はブラジリアン柔術のチームをもつ竹内政司(夢道塾・29)らが参戦。山崎進(現大道塾総本部師範代・23)も団体無所属の選手として初参戦。演武では、東孝・大道塾塾長が氷柱12段割りに成功。…12段ともなると、割るのも大変ならば、積みあげて維持するのも大変のようで、90年代のいつだったか、支える人員が手を滑らせたのか、積みあげた氷柱が雪崩を起こして崩れてしまい、気合いを入れて準備していた東塾長が茫然としたこともあった。

1996年 体力別

元キックボクシング日本王者・松田利彦(土道館)が36歳にして出場。MMA系のアマチュア大会に次々とチャレンジし好成績を収め、現在はバレストラ松戸を運営、プロ修斗王者を何名も育てた鶴屋浩(治政館・25)が初出場。鶴屋は06年に-260準優勝を遂げる。90年代後半は、この大会に出場していた斉藤昇(大道塾総本部・23)、野原健太郎(大道塾総本部・24)、大川真人(大道塾中部本部・18)のように、実力を評価されながら、一度も入賞を果たさぬままキャリアを終えた選手も多い。

1996年 無差別

決勝前、エキシビジョンとして、長田賢一vs佐藤ルミナが行われた。後日、修斗関係者から聞いたところによると、事前に攻防の展開を決めておこうかと長田に訊ねたところ「いや、(関節技を)極められるときは極めちゃってください!」との回答だったそうで……。

1997年 体力別

全日本格闘技選手権の名王者であった赤崎勝久(無門塾・23)と久原清幸(真武館・25)が初参戦。

1999年 体力別

この大会で、小川英樹が大会7連覇(-230で5回、-240で2回)を達成。この記録は16年現在、破られていない。加藤清尚が96年に遭った交通事故から復帰するも、1回戦負け。

1999年 無差別

90年に極真会館全日本ウェイト制空手道選手権で重量級準優勝の実績をもつ滝田蔵が、その後、大道塾東北本部に入門し、32歳にして全日本初出場。一方、後にK-1ファイターとなる堀啓(大道塾木町支部)は17歳で初出場。高校生にして196センチの長身を誇っていたが、33歳の中学教師である沖見正義(千葉支部)のハイキックに一本負けを喫した。

2000年 無差別

北斗旗を観戦に訪れる有名人といえば、夢枕獏(作家)、藤岡弘、(俳優)などが常連だが、他にも地区予選まで観戦に訪れた江頭2:50(芸人)など、ラバーは多い。困ったのはアーチストのGACKTが来場した際、マネージャーさんから「マスコミ陣にプライベートで来てますんで写真に写らないようにお願いします」とお触れが出たとき。こちらも選手以外は写したいとも思ってたが、試合場のそばの席に座られては、写ってしまうもので……。

2001年 体力別

加藤清尚が91年の無差別以来、10年振りの優勝(-240)。下腿切断寸前の負傷からの復活劇は涙を誘った。

2002年 体力別

ITFテコンドーでこの年ミドル級3位、その後ヘビー級で4度優勝する富岡雅人(モランボンテコンドー荒川道場・29)が出場。そういえば90年代前半、ITFテコンドーのトップ選手が出場していた記憶があるのだが、トーナメント表には名を発見できない。ひょっとしたら、飛び入り枠だったのかも……。そう考えると、北斗旗の歴史をコンプリートするためには、飛び入りとして出場した者の氏名まで把握できる記録を発掘することが必要だ。長田賢一は92年以来、10年振りに北斗旗の舞台に復帰。稲田卓也(大道塾横浜支部・30)に敗れるも、以前と変わらぬ美しい組手をみせた。なお、この大会では、エキシビジョンマッチとして、男性4人+女性1人の5人が1チームとなり、同時に5対5で闘う集団戦が実施された。

2002年 無差別

のちにK-1 WGP出場、キックボクシングとMMA双方で国内タイトルを獲得するアレクサンダー・ロバーツ(空柔拳会館・26)が初出場



1995 体力別



1995 無差別



1996 体力別



1996 無差別



1997 体力別



1997 無差別



1998 体力別



1998 無差別

1997年 無差別

辻井恭に続き、西郷隆宏(拳友会・23)、佐藤隆之(拳友会・22)、佐藤敦士(拳友会・26)といった日本拳法系の選手が参戦。それぞれ、強さを感じさせた。

1998年 無差別

日本拳法の西郷隆宏は長いコンパスの前蹴りを駆使し1回戦でアレクセイ・コノネンコと接戦を繰り広げた。そのコノネンコが優勝を果たしたのだから、組み合わせが異なるものだったら、上位入賞を果たしていたに違いない。



1999 体力別



1999 無差別



2000 体力別



2000 無差別



2001 体力別



2002 体力別



2002 無差別



2003 体力別



2003 無差別



2004 体力別



2004 無差別



2005 体力別

2003年 体力別

のちにシュートボクシング等で活躍する崎村暁東(練土館・26)とMMAで成績を残す崎村春来(練土館・27)が出場。なお、2002年体力別に23歳で大道塾総本部から出場している崎村匡如は暁東の弟であり、その後、やはりシュートボクシングでトップランカーとなっている。

2006年 体力別

のちに修斗でバンタム&フェザー級2階級の世界王座を獲得する藤久保博正(パラエストラ松戸・19)、修斗やブラジリアン柔術で活躍した大内敬(パラエストラ小岩・35)が参戦。-230に大道塾中部本部より出場した川上大樹(24)は、その後、キックボクシング系競技に転向し、好成績を収めている。

2006年 無差別

日本拳法で東日本選手権優勝の実績を誇る齋藤徹(日本拳法東雄会・23)が会場。

2007年 体力別

山内真也(日本拳法・29)が、大道塾外の団体所属者としてセーム・シュルト以来10年振りのファイナリストとなる。後にバンクラスのタイトルコンテNDERとなる久松勇二(フリー・35)が参戦。九州本部から出場の花田元誓(20)はのちにキックボクシング団体の王者となる。

2008(秋季)体力別

翌年の世界選手権日本代表選考のため、体力指数制で行われた大会、プロ修斗のメインイベントだった巨匠高磨(パラエストラ仙台・30)が参戦。

2010 体力別

PRIDEなどで活躍した総合格闘家、中村和裕(吉田道場・31)、加藤久輝(大道塾安城同好会・27)と共に初出場。今思えば、第3回世界選手権から半年後、次の4年に向けリ・スタートの大会に相応しいニューカマーの出現だった。

2010 無差別

ヒクソン・グレイシーvs船木誠勝などのレフェリーを務めた塩田啓二(四王塾・44)が会場。セコンドにはUFC日本大会ミドル級トーナメント優勝者・山本喧一らが就いた。

2011年 体力別

2カ月前の東日本大震災により、中止も検討された大会。会場を仙台から名古屋に変更し、開催された。そんななか、震災により津波に流されつつ生還した鈴木清治(大道塾石巻支部・33)が-250優勝。それまで幾度となく全日本選手権に出演していながら優勝には及ばなかった鈴木がこのタイミングで栄冠を手にしたことは、多くの人を勇気づけた。

2011年 無差別

寝技世界一決定戦と呼ばれるアブダビコンバットで07年優勝の塩田さやか(AACC)が初出場。女子では、大道塾以外の所属で他競技で国内外トップクラスの成績をもつ選手が参加したのは、この塩田が初めてだった。

2013年 体力別

-240を制した飯村健一(現大道塾吉祥寺支部支部長・44)が最初に同階級を制したのは89年。24年を経て同一タイトル獲得という恐るべき記録が達成された。

2015年 体力別

加藤智亮(誠真会館・28)が大道塾外所属の選手としてはセーム・シュルト以来18年振りの全日本制覇(-250)。清水裕治(修武会・50)は、89年以來、この大会まで仙台で行われるすべての全日本選手権に会場。

2015年 無差別

渡辺慎二(現大道塾浦和支部支部長)は、1987年に26歳で全日本に初出場(-230)して、途中長期の戦線離脱を挟みつつ、53歳になったこの年も全日本出場(無差別)。



2006 体力別



2006 無差別



2007 体力別



2007 無差別



2008 (春期) 体力別



2008 (秋期) 体力別



2009 体力別



2010 体力別



2010 無差別



2011 体力別



2011 無差別



2012 体力別



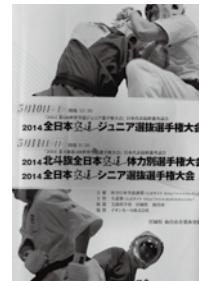
2012 無差別



2013 体力別



2013 無差別



2014 体力別



2015 体力別



2015 無差別



2016 体力別



2016 無差別

